

編集・発行人 樋口みな子

E-mail

minakoginga@gmail.com

(連絡用)

URL <http://www13.plala.or.jp/minginga/>

郵便振替「銀河通信」

02740-7-56535

(郵送6号分1,000円)



2014 野幌から春だより



春は卒業式があり、新入社員や新入生、この春に転勤した人など、旅立ちと新たな出発の季節ですね。左の写真は春の空で

す。我が家の庭周辺はまだ雪が残っています。

長年、中学理科教員として健闘した夫が満期定年を迎えました。さまざまな事情でひとつの仕事を全うするのが難しい時代、この日を晴れやかに迎え、家族として感謝しています。教育への情熱があればこそでした。4月からは再任用で他校に異動して日々奮闘しています。「春風や闘志いだきて丘に立つ」(高浜虚子)の心境でしょうか？

安倍政権が秘密保護法を成立させたり、集団的自衛権の行使を容認しようとしたり、武器の輸出の拡大など、戦争への道に舵を切っているかのようで、不安が募ります。某新聞社の世論調査で、集団的自衛権行使容認に反対すると63%の人が回答したと報告しています。また憲法9条を守りたいという人は64%と平和主義を維持すべきだと考える人たちが増えていることに勇気づけられました。

中国や韓国も、日本の集団的自衛権の行使に反対しています。私も医療九条の会に入っていますが、今まで空気のように思っていた憲法を学ばなくてはと思い始めています。銀河通信の読者が「憲法を学ぼう」と呼びかけています。是非参加してみませんか？

立憲主義は政府を縛るものなのに「個人の尊重」が一番大切だという事がないがしろにされていると思います。個人が尊重されるためにはその生命を大切にすること。自由

が脅かされないようにすること。あたりまえと聞いていたことが、実は憲法で守られていたことを知りました。

図書館の「アンネの日記」が大量に破られた事件がありました。アンネと同じ年頃だった中学生の時に読み、ナチスの迫害に苦しめられながら、瑞々しい感性を失わず書き綴った「アンネの日記」を心の糧にしてきました。戦争を伝える世界記憶遺産です。銀河通信の原点です。どんな理由で破ったのかは不明ですが、ナチスのした残虐行為と同等に思えました。個人の尊厳を傷つけたことをドイツや他国の人々はどう受け止めたでしょう



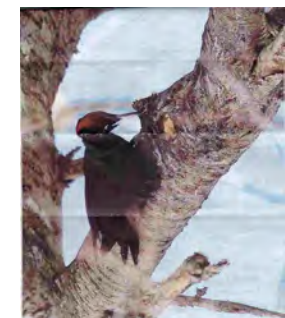
か？二度とあってはならないと思います。

夫の定年を祝って3泊4日で南九州を家族で旅してきました。上写真は3月27日の鹿児島県の知覧特攻平和会館付近の満開の桜です。

17歳から23歳までの若い特攻隊員は死を覚悟して沖縄に向けて飛び立ちました。バスガイドさんはその時の様子を青年と食堂のおばさんとの会話で再現し、参加者の涙を誘いました。前途ある青年たちのあまりにもむごい死に、戦場に息子を送りたくないと思いました。

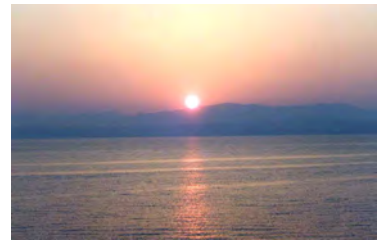
美しい桜が亡くなった青年たちの精霊のように思えて悲しかったです。平和会館には、特攻隊員のたくさんの写真と遺書が展示されていました。実に達筆で、文章もしっかりしていて胸を衝かれました。

平和の大切さを心に刻んだ旅でした。



3. 9野幌のクマゲラ調査で確認されたクマゲラ撮影・対馬俊明さん

南九州4日間かけある記



右写真:3.28 昇る朝日が美しい(指宿)



3月26日(水)から29日(土)まで家族で南九州を旅しました。6時に自宅を出て車で新千歳空港へ。羽田経由で鹿児島空港に着いたのは午後2時を過ぎて

いました。

鹿児島は小雨でしたが、バスで霧島神宮へ。(右写真)建国神話の主人公であるニギノミコトを祀った霧島神宮は創建が6世紀と古い歴史を誇る神社です。



最初は高千穂峰と火常峰の間にある背門丘に建てられたそうです。霧島山の噴火による焼失と再建を繰り返し約500年前に現在の場所に移されました。

ようやく霧島温泉に着いたのは夕方の5時を回っていました。



3月27日(木)快晴。気温はぐんぐん上がり25度。札幌との気温差は15度です。

知覧武家屋敷(左写真)を見学。まるで箱庭のような趣が

あり「薩摩の小京都」と呼ばれています。260年前から変わらぬ姿を保ち続ける武家屋敷庭園が静かなたたずまいでした。庭園文化が現代に引き継がれていることを感じました。柑橘類が屋敷に植えられていて暮らしの一端も垣間見ることができました。

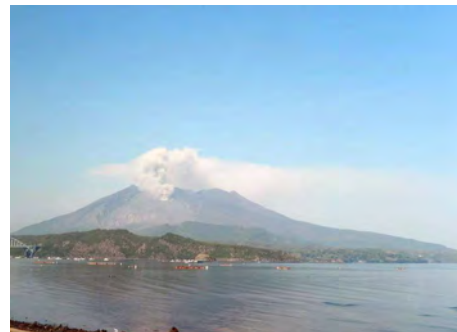
特攻平和会館に行き(1面に紹介)その後、長崎鼻へ。鹿児島県なのに長崎なの?とちょっとびっくり。薩摩半島南東端の東シナ海に突出した岬で指宿にあります。長く先が伸びた鼻という意味だそうです。黒潮洗う青い海に突き出した長崎鼻の先端には白い灯台が立ち、西方にそびえる雄大な開聞岳(最上段の写真)と、岩礁に砕け散る白い波しぶきが、とても綺麗でした。

バスの移動が長い一日。ようやく指宿温泉に着きました。古いホテルでしたが、温泉と料理が良かったです。特に豚骨料理とさつま揚げが美味しかったです。

深夜に星を観測していたのは夫です。こと座の最も明るい恒星のベガや南天の星座かんむり座、ヘルクス座が良く見えたと教えてくれました。双眼鏡を持参していたのですから、さすが「星大好き」人間です。

3月28日(金)快晴。旅慣れた人が多い今回のツアー。食事時間は7時からとなっているのに皆さん6時半には食事を始めているのにびっくり。知らなかった私たちはバスの出発にギリギリになるのです。この日は早くに行動開始。おかげで地平線を昇ってくる朝日を見ることができました。

バスで鹿児島港に向かいここから船で桜島に。バスごと乗船するのです。あっという間の15分でした。船で鹿児島に通学、出勤しているそうです。桜島の人々にとっては大事な足ですね。



桜島は標高1,117m。現在も噴煙を上げる世界有数の活火山。

鹿児島地方気象台によると「昭和火口は09年半ば

から急激に活動が活発になり、10~13年は4年連続で爆発的噴火が800回を超えた」と報告しています。現在5,100人が暮らしていますが火山災害だけではない自然の恵みも大きな魅力のようです。桜島大根、桜島みかんなどの美味し



い農作物は火山の恵みでもあるのです。私は地元で暮らす人々のお話も聞いてみたかったです。

次に向かったのは宮崎県の日南市にある鶴戸神宮。移動距離が長いのでなかなかハードな旅です。

鶴戸神宮は、太平洋の波が打ち寄せる断崖の洞窟に社殿を構えるのが特徴的な神社です。(左上写真)歩くのに疲れた方は人力車を利用することができます。

約700万年前位に海中で出来た水成岩が隆起し、長い間に波に洗われ固い砂岩層だけが板のように積み重なって見えるようになったのが鬼の洗



濯板です。巨大な洗濯板のように見えるので、鬼の洗濯板と呼ばれるようになったそうです。青島から南の巾着島までの約8kmの海岸線に見られると言いますから壮観ですね。(右上)バスの中からの写真です。

みな子の山旅日記

痩せ尾根の急登に緊張した 多峰古峰山（661.1m）



1月に藻岩山と朝里岳に登って以来3ヶ月ぶりの登山が多峰古峰山でした。

アイヌ語でタップコップと読み、こぶのような小山という意味です。

4月6日（日）新札幌を7時半に支笏湖に向けて出発しました。メンバーは5人です。

装備を整えて登山口を9時半に出発しました。林道わきのアカエゾマツの植林が数年前の台風でなぎ倒されていました。ハルニシの大木が鹿の食害で皮がむき



とられていました。夏道の残雪が少なくなり、笹藪になり、リーダーの判断で谷コースをとることにし引き返しました。

頂上直下は厳しい痩せ尾根の急登でした。幸い雪は締まっていて、崩れ落ちる心配がなかったので少し安心できました。私以外の女性二人は某登山教室の生徒さん。私も頼りない講師を務めていましたが、彼女たちは、すっかり立派な山ガールに変身していました。

11時50分頂上到着。少し先の中央分水嶺に立ち、しばし7年前の中央分水嶺踏査の頃を語り合い、頂上で昼食としました。

天候はだんだん崩れて行く。12時半下山を開始。登ってきたルートは厳しすぎるので、なだらかな斜面を選んで下山。

途中林道を出たばかりの4人のグループに会いましたが、すでに13時半を超えていて心配になりました。私たちは登山口に14時10分に到着。無事に登山を終えました。

頂上の眺望はありませんでしたが、残雪の樽前山の姿を見ることが出来たし、久しぶりに自然に触れて心身が軽くなったように感じました。



多峰古峰での撮影：
長谷川雄助さん
岡田秀二さん
樋口みな子



3月29日（土）雨。いよいよ最終日です。

バスは高千穂峡へ進みます。狭くて急な道路で、対向車とすれ違うのもハラハラしましたが、さすがプロの運転手さんは難なく走行します。

かつては秘境と言われ、なかなか行くのが大変と聞いていましたが、今では観光

コースの定番になっているようです。

高千穂峡は、その昔阿蘇火山活動の噴出した溶岩流が、五ヶ瀬川に沿って帯状に流れ出し、急激に冷却されたために柱状節理のすばらしい懸崖となった渓谷です。

昔、渓谷で交通が遮断された所が随所にあり、そこに暮らす人々にとっては橋を架けることが長年の夢だったそうです。

右写真は上の橋が神都高千穂大橋、真ん中が高千穂大橋、下が神橋です。ちなみに上の橋から水面までの高さは約115mもあるそうです。上から見下ろしたら吸い込まれそう



ですね。秋の高千穂峡を、また訪ねたいと思いました。鹿児島島の黒酢の里で見た菜の花も春らしくて、北海道のモノクロの世界から鮮やかな黄色が新鮮でした。夫が好きな花です。

観光を豊かにして下さったのが、地元の50代のガイドさん。熊本弁も交えながら、丁寧かつユーモアあふれる話術で魅了しました。バスガイドの歌も久しぶりに聴きました。プロの気概を持った素敵なガイドで忘れられない旅になりました。

バスは熊本空港へと走り、羽田空港経由で新千歳空港へ。自宅に着いたのは深夜でした。こうして4日間の旅を終えました。

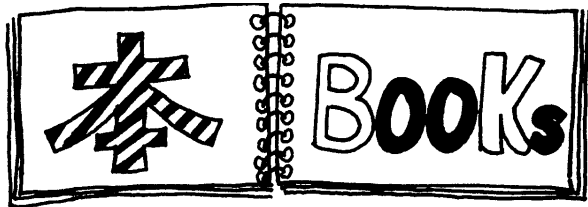
コンパクトにたくさんの観光地が網羅されていて行ったことのない人にはお勧めかもしれません。但し体力が必要です。

前橋汀子さんのコンサートを聴いて

4月5日（土）思いがけなく夫婦で前橋汀子さんのヴァイオリンコンサートを聴く機会がありました。バッハの無伴奏ソナタ&パルティータ全曲演奏会です。

無伴奏なのに、まるで伴奏があるかのように、小さなヴァイオリンから、多彩な音楽が奏でられて感動しました。夫は4月から別の中学校で仕事していますが、とても励まされたと言っています。一台のヴァイオリンから生み出される、奇跡の音楽が素晴らしかったです。デビューから50周年、深紅のドレスが似合う若々しい前橋汀子さんから、真摯に探究した音楽の奥深さを堪能しました。





想像ラジオ

いとうせいこう 著
河出書房新社 1400円+税



『想像ラジオ』は「想像」という電波を使って「あなたの想像力の中だけ」で聞こえるラジオ番組です。

読んでいくうちに、アークは3.11の震災で死んだ人であることが分かってきます。木にひっかかったままで、そこから発信しているのです。

DJアークのラジオ番組を放送する場面から始まります。自身の生い立ちから、音楽に明け暮れた学生時代、そしてミュージシャンの裏方を務めた東京での生活を経て妻子連れで郷里に戻った近況や帰還の理由を語るのです。すると震災で亡くなったたくさんのリスナーから、メールや電話が殺到します。

死んだ本人の残した者たちへの無念の思いが胸に響きます。宗教ではなく、文学の力で生者にも死者にも想像ラジオで声を届けようとするのです。

アークがリスナーに妻と連絡がとれないことを打ち明ける場面があります。するとリスナーから「奥さんと連絡がとれないのは喜ぶべきことだ」と言われ、妻が生きていることが分かります。アークは、想像力と集中力で妻と息子の声を聴きとるのです。夫であり父であるアークをずっと思ってきたことを知ります。シーンとする場面です。

「死者と共にこの国を作り直して行くしかないのにまるで何もなかったように事態にフタをしていく僕らはなんなんだ」「東京大空襲の時も、広島への原爆投下の時も、長崎の時も、他の多くの災害の時も、僕らは死者と手を携えて前に進んできたんじゃないだろうか？しかし、いつからかこの国は死者を抱きしめていることが出来なくなった。それはなぜか？」「声を聴かなくなったんだと思う」「亡くなった人の声に時間をかけて耳を傾けて悲しんで悼んで、同時に少しずつ前を歩くんじゃないのか。死者と共に」と著者はDJの対話を通して問いかけます。

震災と原発事故、死者の言葉を真摯に聴くことから未来を開いていくのではないかと著者の思いが伝わってきました。

いとうせいこうさんはあるインタビューに「震災によって『未来を考える想像力を封じられている』という思いが原動力だった。小説は、文字を読めばもう想像が始まる。想像力が復活する装置として、文学は使える」と語っています。

原発事故や震災で亡くなった人たちの声を想像するなら、「もうこんな悲しい思いをさせないでくれよ」という何万もの声が聞こえてくるように思えました。

20年間の水曜日

日本軍「慰安婦」ハルモニが叫ぶ
ゆるぎない希望

尹美香〔著〕／梁澄子〔訳〕
東方出版 1500円+税



20年間にわたり元慰安婦女性と一緒に水曜デモを行っている尹美香（ユン・ミヒャン）韓国挺身隊問題対策協議会代表が書いた本です。

日本軍『慰安婦』問題とは何かを学んでもらおうと韓国で出版されたジュニア用単行本の日本語版。これほど被害者の証言を集め、戦時性暴力の実態に迫った本は少ないと思います。また本書では、韓国軍がベトナムで起こした性暴力にも触れています。未解決のまま推移する不誠実な日本政府と対比される被害者のハルモニ（おばあさん）が叫ぶゆるぎない希望とは。

尹さんははじめにで「私たちは記憶しなくてはなりません。そして学ばなくてはなりません。日本軍『慰安婦』問題から出発しましたが、性売買被害女性たちに手を差し伸べたハルモニたち、米軍基地村の被害女性たちに堂々とたたかうべきだと激励したハルモニたち、他の戦争被害者たちに連帯を約束したハルモニたちの姿から、自分だけではない他者のために希望を叫ぶ、みんなのための夢を。ハルモニたちのそんな夢が、未来の歴史をつくる若いみなさんの心に伝わることを心から願っています」と書きました。ハルモニたちに心を寄せて、水曜デモに参加してきた尹さんだからこそそのメッセージと受け止めました。

慰安婦にされた女性たちの証言だけでなく、写真まで公表していることに人間としての尊厳を取り戻したいという強い意志が見えて、心揺さぶられました。

金学順さんが、胸が張り裂けそうになる、と言いながら、胸の奥にずっと閉じ込めてきた過去を語り始めたのは、それまで日本政府が繰り返してきた、慰安所は民間業者が経営していたことで、軍、ひいては日本政府にはいっさい責任がない、といった発言にいてもたってもいられなかったからです。45回目の終戦記念日、韓国にとっては大日本帝国からの解放を祝う光復節の前日に、金学順さんは、世界に向かって声を挙げたのです。

「女性のためのアジア平和国民基金」のことについてもわかりやすく書かれています。なぜ国民の募金を集めて見舞い金として済まそうとするのか？ハルモニたちはお金を求めているのではなく、人間としての尊厳を求めているのです。日本は誠実に対応して謝罪すべきです。

ハルモニたち自身が描いた絵も掲載されています。当時の状況や、残酷な行為に苦しめられる姿が伝わってきて、同じ女性として日本軍のした行為に言葉を失いました。

2月に沖縄パネル展が開かれ、今も続く性暴力の実態を知る機会になりました。大人にも読んで欲しい一冊です。



オオカミの声が聞こえる

加藤多一著 地湧社 1500円+税

銀河通信の読者のおひとりでもある児童文学作家の加藤多一さんの新刊。

東京で暮らしていたアイヌの女性

マウコはある時、アイヌとしての自分を取り戻し生きていく道を探すために、北海道に戻ります。アイヌ民族について勉強しようと図書館や博物館を巡っているうちに、100年以上も前に絶滅したエゾオオカミの剥製から見つめられ、何かのメッセージを感じて、行動に移します。

マウコはある日、水族館でアシカの心の声を聴きます。彼女はヌプルクル（霊力のある人）の能力を持っているという設定です。

アイヌの歴史や文化、開拓記念館の展示でマウコが感じたことなど、あらゆるアイヌに関する話題が盛り込まれていて、オオカミ探しに入るまでがやや説明的です。活躍するアイヌの女性が本名で登場もします。

後半、マウコがオオカミの声を聞いて、存在を確認して、旭川動物園の飼育係の青年らの協力を得てオオカミに出会うまでの冒険が、ハラハラドキドキで、面白かったです。

装丁が幻想的で、真夜中にオオカミが現れることを予感させます。

特に若い世代の人たちにアイヌの歴史を知って欲しいという思いが伝わってきます。

今までの加藤多一さんの本とは異色であることは間違いありません。私も絶滅したとされるオオカミに出会ってみたいなど想像するだけで楽しくなりました。

中高生から読める本ですので、アイヌの歴史を知る機会になると思います。

憲法への招待 新版

渋谷秀樹著 岩波新書 800円+税

5章、24の設問の解説を通して憲法の基本原則を丁寧に説明していますが、どうしても専門的で、もう少し平易に論じて欲しかったです。

「憲法とは何か」「人権とはそもそも何か」「どのような人権が保障されるのか」「政府を動かす原理は何か」「政府の活動内容は具体的にどのようなものか」の5章からなっています。

「憲法改正手続を定める憲法96条は改正できるか」の設問に対しては「憲法制定権力がルールの世界における憲法改正権の行使の方法を書き込んだものが改正規範なので、ルールの世界にある改正規範は根本規範と一体化して存在している」「主権の所在や行使の方法に関する根本規範が変更されない限りは、改正できない、あるいは改正してはいけない

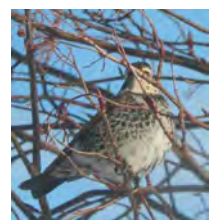


奇跡の動物「ナキウサギ写真展」が好評でした



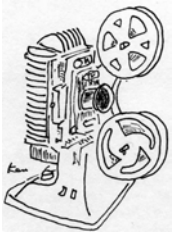
3月25日（火）札幌駅前地下歩行空間（チカホ）でナキウサギ写真展が開かれました。

愛らしいナキウサギの姿に多くの市民が足を止めて見入っていました。私も撮影者が何時間も粘って撮ったナキウサギの思いがけないしぐさに癒されました。（主催・ナキウサギふぁんくらぶ）



2月の某日、我が家の庭にツグミが何羽も飛来しました。ナナカマドの実が大好きで

人の視線もなんのそので夢中でした。



ぬちがふう玉砕場からの証言

朴壽南（パク スナム）監督



沖縄戦における慶良間諸島で強いられた「玉砕」の真実を生存者27人の証言で明らかにするドキュメンタリー。20数年をかけて掘り起こしました。

米軍が真っ先に上陸を目指した慶良間島では、集団自決の生き残りの少年少女たちがその悲劇を語ります。慶良間諸島には朝鮮半島から約1000名の若者が軍属として、21名の少女たちが慰安婦として連行されました。

命がけて脱出し一命をとりとめた朝鮮人元軍属たち6名が、47年ぶりに再び島を訪れ、しまんちゅ（島人）と共に、斬り込みや虐殺の現場を探す旅がはじまります。さらに、この島に連行されてきた慰安婦の少女たちが本島系数のアブチラガマで殺されたと言語の証言によって、その慰安婦たちの存在が明らかになります。

虐げられてきた朝鮮半島の人々と、沖縄の人々。戦時中は互いを知ることができず、助け合うことが出来なかった人たちが今回の旅を通してつながって行きます。

「平和に必要なのは敵を作らないこと」と話し合う朝鮮人元軍属と沖縄の人々に感動しました。

「ぬちがふう」とは、沖縄の言葉で「命あらばこそ」。命があればこそ、私たちは再び出会い、抱き合って笑い、そして泣くことだってできるの意味がこめられていると知りました。

最近、日韓の関係が決定的にいいとは言えません。ハイトスピーチをはじめとして、在日韓国人や朝鮮人への差別的な表現が増えているのに怒りを覚えます。

沖縄で慰安婦にされた朝鮮半島の女性たちのことは、沖縄パネル展で知りました。その期間に上映された映画です。

監督のパク スナムさんは「沖縄の人たちも在日コリアンも言葉を奪われ、歴史を奪われてきた。奪われたものを一つ一つ取り戻し、獲得していく闘いだった」と語っています。多くの人に歴史の真実を知ってもらいたいです。



スタンリーのお弁当箱

インド アモール・グブテ監督

クラスの人気者のスタンリー。家庭の事情でお弁当を持参できない彼に、同級生はおかずを分け与えるが、意地悪な先生によってピンチに立たされてしまいます。そんな彼が友達の友情に支えられて、特大のお弁当を持って来るまでの笑い涙の物語。元気いっぱいの子どもたちの無邪気な笑顔に癒やされ、ドラマを鮮やかに彩るおいしそうなお弁当の数々に目を奪われました。楽しくてちょっぴり切ない。子どもたちは最後まで映画撮影と知らなかったそうです。



家路

久保田直監督

3.11の福島原発事故でバラバラになってしまった家族が、20年近く音信不通だった弟の

帰郷をきっかけに、再び絆を深めていく姿を、オール福島ロケで撮影した家族の再生を描く物語。鬱々とした毎日を過ごす兄を内野聖陽、その弟を松山ケンイチが演じています。

テレビドキュメンタリー作品で数々の受賞歴を持つ久保田直監督が「放射能汚染地域への帰還」というテーマに取り組みました。

先祖代々受け継いできた土地を失ってしまった一家。そこを離れて、未来を想像することすらできない毎日を送っていた彼らの前に、故郷を飛び出したまま連絡すらしてこなかった弟の次郎が現れます。次郎は、血のつながらない兄のした不始末をかぶって、故郷を捨てたことが語られます。次郎は兄と「帰れない故郷」を共有することで、真の家族として未来を見つめはじめます。

黙々と農作業を営む次郎の日常をドキュメンタリー・タッチでとらえたシーンがとて素晴らしいです。松山ケンイチの農作業する姿が様になっていて、同級生から「この地で暮らすことは、ゆっくり自殺するようなものでないか」と諭されても「誰もいなくなったら何もなかったことになる」と応えて、この地で生きる覚悟が、善悪ではなくて「やっと好きな農業で自分らしく生きたいんだ」という決意に私には思えました。

一方で、痴呆の兆候が現われている母、登美子が描かれます。仮設住宅の前で、帰るべき家が不明となり、登美子が必死に孫の名前を叫ぶシーンは、震災後の落ち着いた生活から、さまざまな体の異変として現れたのかと思えるほどの迫力でした。

ラスト、再会した母と次郎は禁止区域の田んぼで田植えを始めるのです。そのユートピアのような光景が、とても自然に受け止められるのも、絶望的な現実の果てに希望の兆しを見出そうとする作り手の真摯な思いが表現されているからこそでしょう。私も「ここが本当に汚染地域なのか？」と、どう受け止めていいのかわかりませんでした。

久保田監督は、田植えシーンは川内村の農家に指導を受け、地元の人たちにも手伝ってもらったそうです。「丹精込めて農業に向き合っていることが心にしみだ」と言います。

俳優陣の確かな演技が素晴らしかったです。劇場公開でしたが、観客が少なく「福島は忘れられている」と残念に思いました。

それでも夜は明ける

アメリカ、イギリス
スティーヴ・マックィーン監督



突然、奴隷として売られて生きぬいた自由黒人の実話をもとに映画化した作品です。

1841年、奴隷制廃止以前のニューヨーク

で家族と一緒に幸せに暮らしていた黒人音楽家ソロモン（キウエテル・イジョフォー）は、ある日突然拉致され奴隷として南部の綿花農園に売られます。

白人たちの非道な仕打ちに虐げられながらも、ソロモンは自身の尊厳を守り続けるのです。

白人使用人が行った首つりのリンチがすさまじく死ぬのではないかとあまりの残酷さにその場から逃げ出したいとなりました。次に売られたところの農場主は「奴隷は家畜より劣る」という人物。綿の収穫量が少ないソロモンをムチ打ちます。体中が見るも無残に傷つけられるシーンや女性奴隷へのレイプも描かれ、黒人奴隷制度を歴史事実として忘れてはならないと訴えます。

監督は黒人で、自由黒人の視点から奴隷制度を描き、今までのステレオタイプの奴隷を描いた映画とは一線を画しています。

人権を持たない奴隷の境遇に対するソロモンの驚きや屈辱感を観客に追体験させ、21世紀の今も非人間的な迫害や差別は続いていると気づかせてくれます。

ソロモンは奴隷制度撤廃を唱えるカナダ人に出会い、12年間の奴隷生活に思いがけない展開が生まれます。ソロモンの誇り高い闘いが報われる瞬間に「生きていて良かった」と感動しました。

アカデミー賞作品賞に輝いた映画です。

タンゴ・リブレ 君を想う

ベルギー・フランス・ルクセンブルク合作
フレデリック・フォンテーヌ 監督

平凡な中年男性が、趣味で通っていたタンゴ教室で出会った自由奔放な女性に惹かれ、新たな人生観を獲得していく姿を描いたドラマ。劇



中タンゴシーンの振り付けを、世界的なカリスマダンサーのマリアーノ・チョチョ・フルンボリが担当し、役者たちが吹き替えなしでタンゴを披露しています。

ラストが痛快！「ショーシャンクの空に」を思い出しました。

輝ける青春

イタリア マルコ・トゥリオ・ジョルダーナ監督

1960年代から21世紀初頭のイタリアを舞台に、ある一家の37年間の年代記を6時間かけて丁寧に描いた物語です。



ローマに暮らす、一般的な中流家庭カラーティ家。実業家の父と教師の母に4人の子供が平穏な日々を過ごしていました。物語は、ニコラとマッテオの兄弟に焦点を当てて描かれていきます。歳が1歳違いの彼らは仲も良く、いくつも共通点を持っていましたが、唯一、人生観が異なり、目標へ辛抱強く歩むニコラに対し、マッテオはその繊細すぎる感受性から世の中と上手く向き合えないでいました。そんな2人の人生は、精神病院で不当な扱いを受けていたジョルジアという少女と出会ったことをきっかけに、激しく動き始めます。

長編小説を読むかのように、前篇の3時間を堪能しました。

ある事件をきっかけに、心優しいニコラは放浪の旅を、一緒に行くはずの繊細なマッテオは突然軍に志願。その後は警官になります。共に育った2人の人生は、大きく分かれていきます。ニコラはジョルジアのような患者を助けたいと精神科医になります。

実際にイタリアで起きた、その時その時の事件を背景に1966年から2003年に至るまでを描いています。フィレンツェの大洪水、学生運動、国立精神病院でのスキャンダル、赤い旅団による連続テロ事件、シシリアでのマフィアへの闘争などに、ニコラやマッテオも時代の影響を受けます。

カラーティ家の人たちは、お互いの意思や気持ちを大切にしている、マッテオの軍隊への入隊にさえも強硬に反対はしません。それゆえに、ふりかかる不幸に対しては、時に無力でした。ニコラは誰にも優しく、みんなを幸せにしようとするけれども、それゆえに悲劇をとめることが出来ません。「純粋な」社会を求めて、暴力に身を投じてしまうニコラの妻ジュリア。寂しさと愛情とそのどちらをも純粋な形で求め続けたマッテオ。

自分の人生と重ね合わせながら2回に分けて観ました。ずいぶん前に公開されたとき、6時間の長さに映画館に行く機会を逃しました。DVDをレンタルで借りての鑑賞でした。

二人のそれぞれの道を対比させつつ、イタリアの激動の時代がリンクしていて、長さを感じさせずに楽しめました。映画史に残る名作です。

金 時江さんのひとり芝居

『オンマの白いチョゴリ』 を観て

3月17日(月)に金時江(キムシガン)さんのひとり芝居「オンマの白いチョゴリ」を観てきました。

シガンさんは在日朝鮮人2世です。主催したのは札幌キリスト教連合会「在日韓国・朝鮮人との共生をめざす委員会」です。

夫と7人の子もたちと、平和に暮らしていた女性が、日本による韓国併合、独立運動、太平洋戦争、朝鮮戦争、ベトナム戦争など朝鮮半島を巻き込む激動の中でひとりの子を残して、家族全員を失うという物語です。

シガンさんは、母の悲しみを体全体で演じました。戦争の実相を語り、特に若い人たちに観てもらいたいと思いました。今は亡きマルセ太郎さんの一人芝居を観たことがあります。シガンさんの温かみのある声も素敵で、子どもを想う気持ちがあふれてとても心に響きました。

憲法講座があちこちで開かれています。シガンさんのひとり芝居も入れてもらいたいですね。平和憲法がどれほど大事かが伝わると思います。

50人ぐらいの小さな会場でしたが、ほぼ満席でした。

サクラマスの赤ちゃんに会いに行こう！



2月23日(日)喜茂別町にある孵化場で3~4cmに育ったサクラマスの稚魚を観察しました。子どもたちもたくさん参加し、スノーハイキングを楽しみました。

購読料をありがとうございます(敬称略)
2014.2.17~4.2

佐々木妙子(札幌市) 藤本雅子(札幌市) 12号分 小澤登美栄(八千代市) 尾崎弘子(札幌市)
12号分 斉藤浪子(函館市) 12号分 久野真紀子(様似町) カンパ含む 塩川哲男(札幌市) 切手で12号分
則末尚弘(旭川市) 渡辺妙子(札幌市) カンパ 藤内英夫(札幌市) カンパ 前原満之(宮崎市)
清水和男(福島町) 伊藤恒雄(江別市) 高柳昌央(東京都) カンパ含む 大野喬子(札幌市) カンパ含む
片山篤子(札幌市) 反橋一夫(札幌市) 中川悦子(札幌市) カンパ含む 高橋宜也(札幌市)
25周年記念祝いとカンパ 森内実江(江別市) 鎌田直子(市川市) カンパ含む 富澤克禮(小平市) カンパ含む
阿保亘(帯広市) 高島拓生(嘉麻市) 中川充(札幌市) 高野ケイ(札幌市)

計72,000円は印刷と送料に使わせて頂きます。ありがとうございました。

3月は忙しい日々でした。一面に書いたので省きますが、私も学校から電話を貰い、夫に内緒で感謝状を書きました。サプライズとして送別会の席で披露されたとか。びっくりしていました。

私にもサプライズが……。美しい装丁のアルバムとたくさんの生徒の寄せ書きです。夫が生徒と理科の実験に取り組む姿や学校祭で巨大なプラネタリウムの前で、生徒に囲まれて笑顔の写真など。同僚が撮って下さいました。我が家にとっては貴重な写真です。写真嫌いで家族で旅行しても「僕はいいよ」といつも写す側に回り、本人の写真がとても少ないのです。個人通信に切り替えた時から、家族のことは書かないようにしてきました。今回だけはお許しください。



4月13日(日)シベリウス弦楽四重奏全曲演奏会に出かけました。こじんまりしたギャラリーでしたが、音楽が身近に感じられてとても良かったです。

雄大な景色が目につかびました。豊かな気持ちになって帰宅。仕上げの編集に気合が入りました。(み)

沖縄パネル展の報告記事と泊原発の廃炉をめざす会の共同代表の常田益代さんの廃炉ラッシュの記事は別紙としました。こちらも是非お読みください。